

わたしの「鹿鳴館物語」

富田 仁

今年はおちょうど鹿鳴館開館から百周年目にあつている。そのせいか、正月早々、テレビや舞台で「鹿鳴館物語」が放映、上演されて好評を博した。鹿鳴館という、華やかな舞踏会が思い出されることだろう。テレビでも舞台でも一つの風俗模様としてそうした舞踏会が登場している。だが、鹿鳴館はたんに舞踏会の場ではなかった。鹿鳴館の開館の背後にはきわめて深刻な問題があつたことを忘れてはなるまい。不平等条約の改正交渉である。

明治十二年、井上馨は外務卿に就任すると、かねて欧米諸国との間に締結していた安政五年の不平等条約の改正に取り組むことになったが、日本人が欧米諸国と同じ水準の生活をしていることを内外に示し、すでに近代国家として十分な条件を整えてい

る日本が不平等条約に甘んじているのは不当であることを訴え、条約改正に踏み切ろうと考え、いわゆる欧化主義の政策を実行に移した。日本人の生活を西洋化し、外国人との交際を密にしようという考えがその欧化主義の根幹にあつた。

たまたま諸外国から来日する人びとも増加し、国賓クラスの人物も訪れることが多くなったが、そのような人物を迎えて宿泊させる施設がまだなかったので、芝の浜御殿内にあつた洋風建築の延遠館を応急的に修理して、ドイツのハインリッヒ親王、アメリカの前大統領グラント將軍などをそこに迎えていた。井上馨は条約改正の交渉のためには仮設の宿泊施設では国際的儀礼にも欠けるので早急に本格的な建物をつくらなくてはならぬと考え、明治十四年には麴

町区田山下門内の元薩摩藩別邸跡（現在の帝國ホテル隣地）に国際的な賓客を宿泊させることのできる施設の建設に着手することにした。その設計にはお雇い外国人ジョサイア・コンダー（一八五二—一九二〇）というイギリス人建築技師が当たり、総経費十八万円を投じ、明治十六年七月に建物の竣工をみた。その洋風建物には『詩經』の「呦呦鹿鳴、食野之苹、我有嘉賓」に由来する「鹿鳴館」という館名がつけられた。命名者は井上馨夫人武子とも深いかわりのある風流官僚として知られた薩摩出身の桜洲山人・中井弘である。

明治十六年十一月二十八日、鹿鳴館には井上馨外務卿が接待役となり、有栖川宮親王、大臣、外国公使など内外の貴顕名士多数が集まり、その落成式が催された。集う者千二百余名。

その盛況ぶりは成島柳北が「朝野新聞」に寄せた「鹿鳴館宴会の私記」にも伝えられている。その一部を引用しよう。

「我が外務卿其夫人と與に主人となり、十一月二十八日を卜し、夜會を開き以て之を落す。内外の嘉賓來り會するもの一千餘

名。漁史亦莉婦と共に籠招を賜ふ。莉婦兒を擧げて未だ幕を出でず、漁史獨り陪宴す。乃ち遽に其の幅を高くし、其の襟を白くし、鞠躬如として館門に入れば園圃曠潤にして、松篁趣を爲し、彩燈爛として晝かと疑ふ。其の屋根を仰げば瓦斯光りを放て、鹿鳴館の三字を現す。其の階を攀れば瑞煙簇り、其の堂に升れば歓聲湧く。その室を數ふれば十餘號有り。謁見の室あり、休憩の室あり、舞踏の室あり、撞球の室あり、吸烟の室あり、茶菓の室あり、酒食の室あり。井々條々。整然肅然」

鹿鳴館は建坪四百四十一坪二勾（約千四百五十五平方米）の二階建てで、左右対称の立面、その前面中央には車寄せがあり、上下階にベランダがとりつけられ、五連のアーチを連らねた建物である。ベランダは幕末以来、日本人の眼には親しまれたものである。設計者コンダーはそのベランダ形式をネオ・バロック様式を基調とする建物に巧みにとり入れ、鹿鳴館に大きな特徴をあたえていたのである。

鹿鳴館には井上武子をはじめとして当時の上流社会の婦人たちが多数集まり、華麗

な舞踏会のホステス役をつとめたことで知られるが、欧化主義の行きすぎがやがて社会の批判を受けるようになる。明治の諷刺画家、フランス人ジョルジュ・ビゴーも鹿鳴館風俗をとりあげ、その猿真似をきびしく指弾している。『お菊さん』の作者ピエール・ロティは明治十八年十一月三日に鹿鳴館の夜会に招かれるが、これを「江戸の舞踏會」に描いている。さらに芥川龍之介がロティの作品を踏まえて「舞踏會」を執筆している。また、富田常雄「姿三四郎」にも鹿鳴館が登場するというように、明治十年代後半の風俗絵巻として鹿鳴館はしばしば重要な役割を果たしている。

わたしは目下、この鹿鳴館のさまざまな側面をとりあげて一本にまとめる準備を進めていく。条約改正の交渉を有利にしようとして鹿鳴館に象徴される欧化主義を遂行した井上馨であったが、結局、その交渉は失敗してしまふ。日清戦争で勝利を収めたことにより、日本は明治三十二年になってようやく改正に漕ぎつけることができるのである。それでは鹿鳴館はむなしくも滑稽な猿芝居の殿堂にすぎなかったのだろうか

か。さらにいえば、今日、鹿鳴館の夜会はまったく過去の營爲として見過してしまつてよいものだろうか。そのようなことをも考えつつ、鹿鳴館の建築、音楽、舞踏、料理、衣裳などはもとよりのこと、そこにかわつた人びとの人間模様をも眺めてみようというのが、わたしの「鹿鳴館物語」の構想である。

そこではすでに近藤富枝「鹿鳴館貴婦人考」にみられるように、明治政府の高官士族夫人、令嬢などを中心とする上流社会の淑女たちが緩なす人間模様にも触れることになるだろうが、わたしとしてはこれまでにあまりとりあげられることのなかった人びとも眼を向けるつもりである。

のちに華族会館（現在の霞会館の前身）に借受けられ、大きく変貌することになるこの鹿鳴館を舞台に展開する人間模様と風俗模様を文獻・資料の類から実証的に描いていくことがこれから書くわたしの「鹿鳴館物語」の内容となる。創作ではなく、記録に基づく物語である。十一月二十八日の百周年までには上梓（白水社から刊行予定）したいものである。（一九八四・一二四）